

西光

第 6 号

百橋山 西 光 寺
高岡市京町一〇一・二五
電話(〇七六六)二二二九七
FAX(〇七六六)二二二三七
平成四年九月九日

現代「寺・テラ・てら」事情

今や日本は経済大国となり、世界でも他に例のない経済発展を遂げた。ここ五十年の日本の人々の知恵と努力は世界の驚異や畏敬の的でもある。日本の経済構造そのものを高度情報化社会やハイテク産業といった世界の先端を行くものに成し遂げた。ところが一方で東西の緊張緩和にもかかわらず、民族紛争へのPKO派遣問題やまた戦前の従軍慰安婦問題など、過去と現代の解決すべき諸問題が一気に噴き出している。世界的な経済の先行きの不透明な状況が続く、また日本ではバブルの崩壊や不況が進行し、折角の経済大国もどことなく思わしくない昨今である。また個々の家庭を省みると、一応安定した社会と暮しが浸透し、平和で豊かな生活が実現したかに見える。また週休二日の浸透で休日や余暇が増え、さらに便利な交通手段やレジャー施設が利用出来るようになった。しかし既に地方では村や町の過疎化と老年寄りの高齢化が取り沙汰され、一方都会では独居老人や青年をめぐる住宅問題をはじめ、流入する外国からの出稼ぎ労働者の受け入れ問題など社会・生活環境の悪化が指摘されている。若者の結婚難や老人の介護など、機械やハイテクや金で解決できない、人と人との関わりに関するノウハウが一番立ち後れている。

さてこのような状況の中で「寺」はいかにあるべきか。かつての自然の恵みに囲まれ、また家族と共にあり、信仰と感謝の日々を送る家庭は今日ではなかなか得難いものになりつつある。厳しく云えば人は一人一人が孤独の中で生き、また死んで行くような寂しいことになりかねない。逆にそんな中で人はそれぞれが求めるものを異にし、また相当にわがままな要求を主張するようになった。一方では結婚や金儲けや霊感なるものを餌にした新興宗教がはびこり、それに没頭して我を忘れる人がおり、他方自らの心の平安と自分の将来への希望や見通しを回避して、ひたすら現在の利害に埋没して、信心や願いの世界から遠ざかるうとする向きもある。さらに本質的な意義よりも儀式としての法事・法要に伝統的な先祖供養としての役割を果して事足りるとする傾向も強い。

このような多様な関心と超多忙社会にあつて、「寺」はいかにあるべきか。せっかく休日や余暇が増えても、寺の法話会や報恩講に参詣し、人生を考え、信心について学ぶと云う人は必ずしも多くはない。よって少なくとも門徒の一人一人の心とゆくり話をする機会は大変重要である。年忌法要や毎年の報恩講、さらに毎月の月忌参りの中で折り組んで話されることは、それぞれの人がいかに多くの問題や悩みを抱え、また真剣に取り組んでいるかということが分かる。毎月一人暮らしの年寄りを月参りに尋ね、また報恩講に廻り、寝たきり老人をかかえた中年家庭や若者が都会へ出てしまった家を訪れると、迫り来る老いや病氣や、はたまた親・兄弟や子供のこ、すなわち「家」のことに限らない心配を持つているかを訴え続けるのである。もちろんそこには愚痴ばかりではない。自慢も嬉しさもともに交錯する。すなわち縁あつて家族となり、また縁あつて一家をなすが故に、喜びも悩みも苦勞も共に有り続けるのである。現代は人と人との縁の薄い時代である。しかし縁なくしては、この世に生を得ず、また縁なくしては人との出会いもなく、さらには行く先も見えない。孤独で暗闇の未来しかない。賜りたる限られた人生の中で、因縁の輪を回し続けるのである。それは因縁を理解する者は、やがてこの世に縁の途絶える時があることを存知しているからである。すなわち因縁を知る者は自分の行き先が見えてい

るのである。寺にとって年忌法要や報恩講は門徒の方々と、人間にとっての因縁と流れ行く時間を考える最も大切な機会である。さらに葬儀は限りある生の中でその人がいかに因縁の輪を回したかを偲ぶとともに、この世に業縁の切れた時、人の世のはかなさと御縁の大切さを知らしむる機会である。葬式仏教と言われて久しいが、キリスト教でも、イスラム教でも葬儀は最も大きな儀式である。立派な宗教には人のこの世への総決算としての臨終・葬儀に立会い、旅立つ人をして悔悟させ、また残された人々を安心させるという重要な役割がある。人の臨終・葬儀はどしどししみじみとして、御縁の失われていく寂寥に誰の人も信心深くなる。しかし昨今はこのしおらしさも持続しない。未来に続く永遠の時間よりも現実の利害、ご縁よりも、自分のことなど、今の世相は寺を巡る環境にとってなかなか厳しい。

「標語」

「光明てらしてはがらかに、いたらぬところはさらになし。」（「浄土和讃」）

《真宗ひとこと知識》

平生業成（へいぜいごうじょう）
信心を得れば、いつでも浄土に生まれる身と定まれること。これに対して、臨終を待つてはじめて往生がかなうとするを臨終業成という。他力信心が定まれば、いつでも正定聚（浄土往生が決定した人びと）に入ると説かれる。よって真宗では平生業成を説く。蓮如の「御文」には「平生に弥陀如来の本願のわれらをたすけたまう・仏智他力のさずけによりて、本願の由来を存知するものなり」ところうるが、すなわち平生業成の義なり。されば平生業成といふは、いまのことわりをききひらきて、往生治定とおもいさだむるくらいを、一念発起入正定聚とも、平生業成とも、即得往生住不退転ともいふなり」と説かれる。

《永代祠堂について》

皆様からお預かりした永代供養の祠堂料は、限りある生を如来の賜りによつて精一杯生きた故人を偲ぶよすがとして、久しく伝わるものと考え、寺の莊嚴や法衣、あるいは備品などに充てています。また何人かの祠堂料を合わせ、大きなものを備え付ける場合もあります。昨年の大法要の時に披露目した中尊前の前卓も、多くの方々の祠堂料によるものです。それまでの前卓が余りにひどく破損してしましたので、この機会にと新調させて頂きました。亡くなられた方の法名とともに願主の名も残すようにしています。

《行事予定》

一月一日・二日・三日	修正会・金剛参り	
一月八日	法話会（初お講）	〔講師〕教願寺 釜田恒明師
三月八日	法話会	〔講師〕教願寺 釜田恒明師
毎月八日	法話会	〔講師〕教願寺 釜田恒明師
八月七日・八日	永代祠堂経会	〔講師〕光専寺 葉室文昭師
八月十四日・十五日	お盆	
十月八日	報恩講	〔講師〕光専寺 葉室文昭師
九月	法話会（終お講）	〔講師〕願浄寺 葉室文昭師
十一月八日	御正忌	〔講師〕光専寺 葉室文昭師
十一月二十七日	除夜勤行（除夜の鐘）	〔講師〕願浄寺 葉室文昭師
十二月三十一日		〔講師〕願浄寺 葉室文昭師

